

辞書ではよくわからない英語の語句と用法

—その4: 「“you”は誰のこと?」—

藤 本 規 夫

1. 日本語の人称代名詞

自分のことを指す「私」や「僕」を一人称、相手のことをいう「あなた」「お前」は二人称、第三者を指す「彼」「彼女」あるいは「それ」などは三人称、という分け方はだれでも知っているが、この他にもいろいろな言い方があって、相手や場面によって適切な使い分けが求められるので、日本語の人称代名詞はとても複雑である。日本人の場合は普段あまり意識しないで適切な人称代名詞を使って会話をしているが、外国人にとって一番難しい日本語の人称はどれだろうか。それは文句なく二人称であろう。二人称の中でも、初めて会う人や目上の人に対する呼びかけをどうするかは日本人でも悩むところである。

「あなた」はどちらかというといねいな言い方であり、礼を失することがないように思われるが、これがなかなか難物である。例えば、会社などの組織の上司や目上の人に対して、「あなた」という言い方はすべきでないだろう。会社の上司に「あなた」と呼びかけて首になった外国人がいるという話もあるくらいである¹。これは、外国人が日本語を習う時に、「英語の“you”に当たるのは、『あなた』です」と教わるからだろう。もっとも、日本人の場合も、学校で英語を日本語に訳す際には、いつも you = あなた、とやっているのではないだろうか。

日本語で相手を呼ぶ場合は、先生が生徒や学生に「あなた」と言ったり、奥さんが夫に、あるいは親が子どもに「あなた」と言ったりすることはあっても、上司や目上、あるいは尊敬すべき相手に対しては「部長」「課長」「先生」などと役職名を使うことが多い。子どもが親を呼ぶ場合は、やはり「あなた」でなく、「お父さん」「お母さん」などになるのが普通であり、兄や姉を呼ぶ場合は、「お兄さん」「お姉さん」などとなる。デパートの店員に「あなた」と呼び掛けられたら、お客としては決していい感じはしない。やはり「お客さま」などが一般的である。部下が部長に面と向かって「あなたは」と呼びかけたり、息子が父親に「あなたは」と呼びかけるとすれば、ケンカをふっかけているときぐらいのものであろう。

上司や目上だけでなく、初対面の人に対する呼びかけにも苦勞する。道で落とし物をした人の後ろを歩いていたとして、どう呼び止めるかの判断はむづかしい。拾ってから、「これ、あなたなのでしょう」とか、「これ、おたくのじゃないですか」とか言えないこともないが、もう一つじっくりこないような気がする。相手が若いからといっても、「これ、君が落としたんじゃない」と言うのも気が引ける。この場合は、いっそうのこと二人称は省略して、「もしもし、なにか落ちましたよ」とか、「なにか落ちたよ」と相手の年齢好などによって使い分けるのが最も無難かもしれない。

外国人からみても「あなた」は不思議な言葉らしい。中国人の鄭麗芸さんが、ある日本人宅を訪問した時の次の逸話を紹介している²。

その時、台所から、
「あなた、ステレオをつけて」と、福田さんの声が出た。

すると、隣に座っている福田さんのご主人は、

「はい」と応じて、素早くステレオのスイッチを入れた。

あれ、呼びかけている時にどうして二人称単数の「あなた」なの？そして、ご主人はそこにいないのに、どうして二人称「あなた」にちゃんと応じているのか、やはり夫婦の靈感の力だろうか、それとも「あなた」はご主人のニックネームなのか。

その後、福田さんは何度も「あなた」と呼び掛け、ご主人も何度も応じていた。私には「あなた」と一回も呼んでくれなかった。

このように相手や場面によって使い分けたり、全く二人称を使わなかったりと、日本人も大いに苦労している訳であるが、目上の人や知らない人に対する二人称は存在しないと言いつける人もいる³。

2. 英語の二人称代名詞

英語の場合は、一人称は I/we, 二人称は you, 三人称は he/she/it/they と習っており、特に二人称は一人だろうが、複数だろうがお構いないし、相手がどんなに偉い人であっても原則的には you でいいのは便利である。英語の習い始めのころに、「日本語は二人称がややこしいが、英語は一つしかないから簡単である」と教えられ、英文和訳の際は常に you = あなた、と機械的にやってきたからそれが頭にこびりついている。しかし、ことはそんなに単純ではなく、you は必ずしも「あなた」で代表される二人称を意味するとは限らず、日本語とは別の意味で複雑である。

では、辞書や参考書ではどのように説明されているのだろうか。

〈1〉『ランダムハウス英和大辞典』1994年第2版の you を引くと、一般の二人称用法とは別の使い方が次のように記されている。

2 《人一般を指す総称用法》人は [が]、人は誰でも (one よりくだけた使い方、通常日本語に訳さない) : Unless *you* cultivate your land, *you* won't have good crops. 土地を耕さなければよい作物はできない。

〈2〉江川泰一郎氏の『英文法解説』(1998年、金子書房、P.42) では、you の不定用法として次のように解説されている。

(2) you 相手を含めて一般に人々を表す。

You can't make an omelet without breaking eggs.

(卵を割らずにオムレツは作れない[まかぬ種は生えぬ]) 〈ことわざ〉

〈3〉英国人の T. D. ミントン氏は『日本人の英文法』(安竹内ひろし訳、1999年、研究社出版、P.27-29) で次のように述べている。

私は何年も日本で英語を教えてきて、日本人の英語学習者に、you を一般の人々の意味で使わせることが非常に難しいことを痛感しています。心理的な抵抗があるとすれば、それはずっと英文和訳ばかりやってきて、you が出てくるといつまでも「あなた」と訳す習慣がついてしまったからではないでしょうか。でも現実には、人々一般を表すのに、we より you のほうがずっとよく使われているのです。しかも注意すべきは、そのように使われた you は I も含む概念だということなのです。I の反語としての you ではないのです。(略)「一般に人は」の意味では you を使い、一般論に当てはまらない集団の

存在が明らかなきだけ、weを使うようにしてください。

〈4〉同じく英国人のアラン・ターニー氏は『英語のしくみが見えてくる』（1991年、光文社、P.78-79）の中で、「youをIの意味で使う」ことがあると次のように説明している。

youがイコール「一般の人たち」を示すからといっても、じつは一般論でなく、自分自身の意見を述べている場合もある。

とくに、イギリス人が口にするいい方で、youをIの意味で使う。なぜIを避けるかという、自分の意見は一般論だ、常識だ、と考えるからだ。それでyouを口にするのだが、本人が心からいいたいことは、一般論のいい方の裏にある本心は、I think（と僕は思う）だ。

たとえば、のら犬やのらネコが虐待されていたとする。石などをぶつけられて、可哀想だ。それをいうのに、

You don't like to see animals suffer, do you?

「痛いめにあって、君はあんな場面、見たくないだろう？」ではない。One doesn't like [Nobody likes] to see …のことで、「人間なら、あんなシーンはイヤなはずだ」。だが、結局は、「僕は可哀想だと思うな。君もそう思うだろう？」という本人の意見がこめられている。

これらの説明からわかることは、youは「あなた」などを意味する純粹の二人称代名詞としての用法以外に、「一般の人びと」などを意味する総称用法、さらには「わたし」という一人称を意味する場合もあることである。

英字新聞などを読んでいるとこれらの例に事欠かないが、実際にyouが純粹の二人称とは違った意味で使われている例をあげてみる。（下線は筆者）

〈1〉オーストラリアの難民担当大臣が、亡命を求める人々に対する政策が厳し過ぎるのではないかと、自分の娘に責められた時の反応。

“I feel very compassionate about people who have died on vessels trying to come unlawfully to Australia and I ask myself what you can do in administering public policy that keeps people off life-taking voyages,” he said. “Sometimes it means you have to take some decisions in relation to people in the broader national interest that some people will say reflects a lack of compassion.” (*The Age*, September 17, 2002)

（要訳：「不法にオーストラリアへ来ようとして船の上で死んでしまった人たちにはとても同情している。そしてそんな風な命がけの船旅を止めさせるために、どのように対策を講じたらいいかいつも悩むところだ」「時には、一部の人は情け容赦もない、と批判されるようなことになっても、大局的に国民の利益を考えた決定をしなければならないこともある」）

この文章の最初の例では、I ask myself what you can do …となっており、直訳すると「あなたはなにができるか、と私は自問する」なるが、それでは意味が通じない。ここのyouは明らかに自分のことを指しているが、Iとyouが同じ意味で同時に使われているところが面白い。二番目の例では、直訳は「時には、あなたは……決定をしなければならない」となるが、人に対して言っているのではなく、自分に言い聞かせていると考える方が自然である。しかし、いずれの場合も「あなただっって私の立場になればそうでしょう」という含意があると考えられる。日本語に訳す際には、敢えて主語を省略した方が自然に聞こえる。

〈2〉最近の新しい旅行傾向についての記事である。年に一回長期旅行するというのは過去のものになりつつあり、最近では短期の旅行を数多くする、という傾向になりつつある。そして

“An advantage of the Internet is that you can book a weekend away at the last minute, and get a great deal. Electronic ticketing means you can book your flight on Friday morning and be jetting off that evening.”

From London you can make a weekend trip to New York for about £253 …

(*International Herald Tribune*, September 27, 2002)

(要訳：「インターネットのいいところは、出発ぎりぎりの時点でも週末旅行の予約ができ、しかも格安の値段で手に入れられることである。インターネットによる発券を利用すれば、金曜日の朝に予約してその夕方には機上の人となることが可能になった」ロンドン発でニューヨークへの週末旅行なら253ポンドで大丈夫だ。)

この場合の you は「誰でも」という一般的な対象を指している。日本語に訳す際には、この例でも主語を省略しても誤解は与えないし、省略する方が自然である。

〈3〉you は人間だけに使われるとは限らないという例がある。「生態系が地球温暖化によって大きく変化している」という記事では、影響を受けている動物や植物について you を使っている。温室ガスによる地球温暖化の結果、気候変動のペースが早まっており、生態系がそれに適合するために移動している。一部は北極に向かっている。動植物は相互依存しているが、種によって移動速度が異なっている。影響を受けている種の場合は、「食べるものを変えなければならない。場合によっては、食べるものの種類が減ることもあるし、食べ物を求めて今までより遠くまで行かなければならないこともある。これらの変化はすべて代償を伴うということになる」

この例では、原文の主語は you だが、もちろん動植物のことを指している。

Citing the new work and studies of past climate shifts, he said a significant problem looms: Animals and plants that rely on one another are likely to migrate at different rates. Referring to affected species, Alley said, “You’ll have to change what you eat, or rely on fewer things to eat, or travel farther to eat, all of which have costs.” (*International Herald Tribune*, January 3, 2003)

注

1. 田中克彦「敬語は日本語を世界から閉ざす」『月間言語』1999年, Vol. 28, No11, 大修館書店, P. 42
2. 鄭麗芸『日中比較文化論』1999年, 駿河台出版社, P. 77
3. 高島俊男『お言葉ですが……』1996年, 文芸春秋, P. 72; 鈴木孝夫『ことばと文化』1973年, 岩波書店, P. 132

参考文献

- アラン・ターニー『英語のしくみが見えてくる』1991年, 光文社
江川泰一郎『英文法解説』1998年, 金子書房
河野一郎『誤訳をしないための翻訳英和辞典』2002年, DHC
鈴木孝夫『ことばと文化』1973, 岩波書店
高島俊男『お言葉ですが……』1996年, 文芸春秋
田中克彦「敬語は日本語を世界から閉ざす」『月間言語』1999年, Vol. 28, No11, 大修館書店
副島隆彦『完結・英文法の謎を解く』1998年, ちくま書房
マーク・ピーターセン『心にとどく英語』1999年, 岩波書店
森本哲郎『日本語 表と裏』1988年, 新潮社
鄭麗芸『日中比較文化論』1999年, 駿河台出版社
ロジャー・パルバース, 上杉隼人訳『ほんとうの英語がわかる—51の処方箋—』2001年, 新潮社